

異貌の日本近代思想 [1]

西田幾多郎

三木清

岸田劉生

高村光太郎

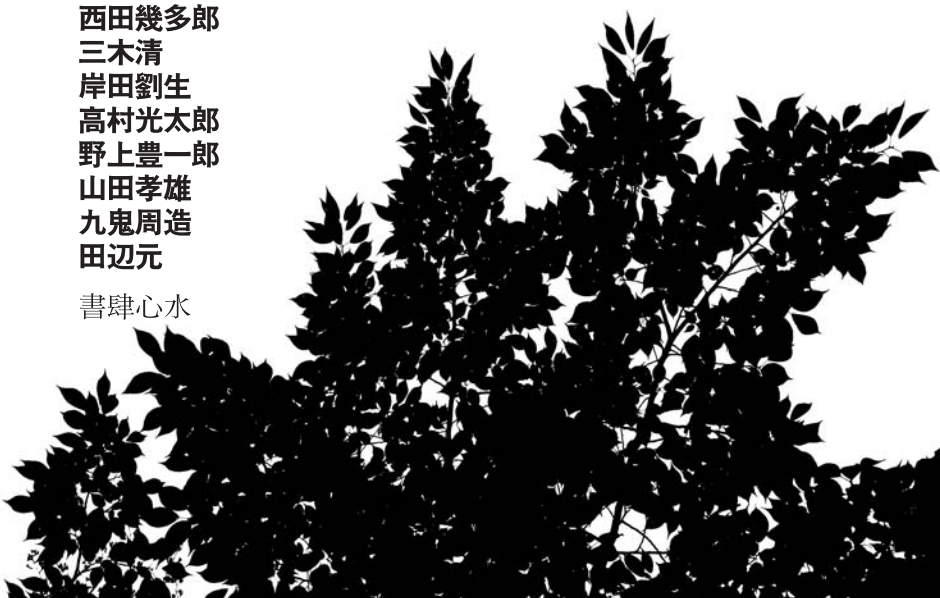
野上豊一郎

山田孝雄

九鬼周造

田辺元

書肆心水



私は私の内にある民族的伝統を内から味わいそれを内から生かす事を知った。しかも私は欧風審美からそこに出発したのである。私は欧風審美からとるべきものは大ていとった。その眼で私は新しく、古い東洋を見て驚いたのである。かくて私は内面的に西洋と東洋との融合を私の仕事の上でかなり完全に有機的に成し遂げつつあるのを自認している。これは決して、外面から計画したのではなく、ひとりになったのである所へまた或る力がある。

岸田劉生

異
貌
の
日
本
近
代
思
想
「
1
」

目
次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

西田幾多郎

新しいロジックを求めて 26

ヒューマニズムの行き詰まりから新しい人間へ 38

歴史的生命の世界 48

三木 清

東亜協同体と近代的世界主義 64

東洋文化と西洋文化 77

岸田 劉生

近代の誘惑を卒業した誇りと孤独 90

今日の悪趣味的時代に処する道 100

東洋の「卑近美」 114

高村 光太郎

美と生命 134

日本美の源泉 147

野上 豊一郎

〈能楽〉

〈芸術〉

〈絵画〉

〈哲学〉

〈哲学〉

能の物狂い 166

能の写実主義と様式化 191

山田孝雄

「は」と係助詞 208

西洋化日本における文法学の困難 222

日本の文字の歴史学 236

日本の敬語と文法 241

九鬼周造

偶然と運命 256

驚きの情と偶然性 264

田辺元

常識・科学・哲学——東洋思想と西洋思想との実践的媒介 294

〈哲学〉

〈哲学〉

〈国文学〉

SAMPLE
Shosha-Shinsui.com

2卷
目次[illegible]

本書について

日本がなかば強いられるようにして近代化の道を歩み始めて以来、日本の思想界の根柢には一貫して進歩／保守、あるいは左翼／右翼という図式がありました。対立する立場への批判として各自の思想が練りあげられて議論が展開してきたのです。敗戦という大転換を経てもその図式自体は維持され、例えば丸山眞男と福田恆存の関係性のようなものが日本の思想界の基本的な枠組を作っていました。しかし経済成長が終焉し、世紀の変わり目が見えてきたころから、進歩／保守、左翼／右翼という二項対立の図式で歴史、社会、世界情勢を考えることへの反省が求められてきています。

日本人の大多数が近代性というものにアンビヴァレントな感情をいだきつづけてきたことは国民的共通理解です。近代性というものはごく大雑把な観念で、議論のうえでは扱いの難しい言葉ですが、確かな実在性のある観念でもあり、その大雑把さと確かな実在性こそがもつ大きな力で人々の感情を強く左右しています。そのアンビヴァレントな感情をいだきつづき、進歩／保守、あるいは左翼／右翼のいずれかの立場をアイデンティティとすることは、アンビヴァレンスからのいちおうの解放であるとともに、葛藤を視野から隠すことでもあります。隠されて深いところに抑圧された葛藤がはらんでいる問題は未解決のもので、何かきっかけがあるたびに強い懷疑となつて浮上してきます。

本書に文章を収めた各人は、哲学から芸術、そして政治まで、その仕事の分野はさまざまですが、その多くに共通して見られるのは、欧米で生まれ育った理論や方法や生活様式は欧米の歴史を背負ったものであり、それを無闇に真似ても日本の現実をつかむことはできないし、われわれの思想や美や福祉を発展させることもできないという考えです。彼らは模倣的な近代化の価値を疑って、内発的で創造的な近代化を考えた人々でした。（そして実際に独自の新しいものを創造した人々でした。）こうした考えを持っていた近代日本人はもちろん本書に文章を収めた各人ばかりではなく、最も著名な例をあげれば夏目漱石がそうした傾向をもつ知識人でしたが、本書に文章を収めた各人の場合は、(1)この問題を哲学ならその哲学そのものとして、絵画ならその絵画そのものとして生涯表現しつづけたということ、(2)二十世紀後半においてはその思想がよく顧みられなかったということ、(3)あるいは人物自体が忘れられていたということに意味があります。近代性を問う彼らの思想が論じられた場合でも、表面的な評価にとどまっていたり、紋切り型の形式的な評価であるためにかえって問題の本質を見えなくしてしまうような例がほとんどでした。

いわゆる戦後民主主義の風潮のもと、二十世紀の末までは、こうした彼らの思想課題は保守的、右翼的、反動的な傾きをもつものと見られることが少なくなく、知的な思想界ではあまり取りあげられませんでした。評価される場合でも狭い意味での芸術的あるいは学問的な領域にとどめる文脈での評価がほとんどで、社会を方向づける思想として扱う文脈ではなかったのです。戦後の思想界は、大学世界、そして大学世界と一般社会を媒介する、岩波書店を代表とするようなメディアにリードされ、主流はいわゆる進歩的、左翼的なものであったことがその大きな理由でしょう。また、保守的、右翼的な論壇にとっても、こうした思想課題は、援用するには政治的な刺激の弱いどっちつかずのものであったせい

本書について

か、あまり論じられることはありませんでした。

避けようもなく、また避けるべきでもなかった近代化を、いかに内発的で創造的なものにしていくかを課題とした彼らは、みな十九世紀後半に生まれ育った人で、急な近代化に伴う強いアンビヴァレンスを身体化した言葉を遺しました。いま現実の諸問題を目の前にして「けっきょく日本は近代化できていない」という言葉がよく語られています。嘆きでもあり、非難でもあり、反省でもあるようなこの認識に対して、本書の著者の言葉は今後の方向性を考えるよすがとなるでしょう。

例えば合理的予測の重視は進歩的近代性の特徴ですが、短期的に合理的と見えた選択が長期の複雑多様な因果関係のなかでその意図を大きくはずれた現実へと至りつくことは少なくありません。合理的予測による必然性を基礎とする価値観に対して、歴史的な偶然性を視野に入れた立場をとることの意味が九鬼周造や津田左右吉によって示されています。これは知性の或る種の限界を重く見る立場ですが、いわゆる保守的道徳主義と同じものではありません。

本書第1巻には、主著に『偶然性の問題』をもつ哲学者の九鬼周造による「驚きの情と偶然性」（一九三九年）と「偶然と運命」（一九四一年）を収録しました。歴史家の津田左右吉は第2巻収録の文章（一九三四年）で法則性と偶然性と歴史性の関係についてこのように語っています。

「歴史の学においてもし何等かの法則のあることが考え得られるとするならば、それは歴史の進展の過程についてのことであろう。そうしてそれを求める方法は、多くの類似した事例から帰納することの外にはなからう。それについては二つのことが考えられるので、その一つは、多くの事例に共通なことを取り出して、しからざるものを捨てるということであろう。しかし歴史の過程はすべてが個性のある

特異のものであって、そこに過程の意味があるから、類似の過程というものを求めることは、本来できないはずである。強いてそういうものを探し出してみたところで、その数は極めて少く、従ってそれから法則を帰納するようなことはできそうにない。同じようなことがいくたびもくりかえされるばあいにはそういうことができるとも考えられようが、くりかえされることは実は歴史の過程ではない。それは自然界においてのみ見られる現象であらう。もう一つは、その過程において必然的な関係をもつことを取り出して偶然に起ったことを捨てるということであらう。けれども何が必然的な関係をもつことであり何が偶然に起ったことであるかは、そのばあいばあいで一々違っているし、根本的にはこの二つを性質の違ったもの対立するものとして区別することに既にむりがある。」

近代性をもつ進歩性には新しいものを尊び古いものをさげすむ、あるいは古いものの積極的評価をそれとなく避けるという態度が伴っています。ハンセン病と闘いながら日本初のニーチェ全集を個人完訳で果たした文芸批評家の生田長江は、本書第2巻収録の文章（一九二五年）で次のように語っています。

「新しい物の偏重、旧い物の偏軽は、決して人類の歴史と共に古いものではない。日本においてはわずかに一世紀足らずを、ヨーロッパにおいても高々二、三世紀を過去へ引き返せば、それまで人類は何よりも先ず、因襲や伝統を尊重していたのである。しかも、それが因襲や伝統であることの故に、その前に跪ひざまずいていたのである。先王の道といい、祖先の遺風というようなものが、権威の上の権威であったのは、今の時代の新事物崇拜に対する過去の時代の旧事物崇拜を意味するものでなくして何であらう。

新事物を価値ありとし、優れりとしている今の時代の人々も、実際上の事実としては旧時代の旧事物をなつかしみ、よろこぶ場合がないではない。ただ、その場合、彼等はそうした懐旧好古の情を、十分

本書について

道理にかなわないものでもあるかの如く、いくぶん恥じらうようにさえ見えるのである。これに対して、過去の時代の人々も、實際上の事実としては、新奇なる事物に興味をもったり愛着を感じたりした場合がないではない。ただ、その場合、彼等はそうした興味や愛着を、ややもすれば是認されにくいもの、従って成るべく抑制されねばならぬ欲情として考えていたかのようである。

すなわち、今日においては、人々が新事物を新事物なるが故に尊重しなければならぬと考えている如く、過去においては人々が、旧事物を旧事物なるが故に尊重しなければならぬと考えていた。そしてそのように考えていた間にはなほ長い。過去の時代における旧事物崇拜が、旧時代的先入見の一にすぎなかったとすれば、今の時代における新事物の崇拜もまた、近代的迷信の一にすぎない。」

これに似たことを画家の岸田劉生も本書第1巻収録の文章（一九三三年）で指摘しています。

『旧』いという事に対する軽蔑ないしは恐迫は、もう五十年昔の夢となつていいはずである。旧いという事が何でも悪いという事となつたのは実に最近五十年來の事であらうと思う。昔は『旧』いという事は尊いという事であった。しかし、新しい西洋文明が入って、いわゆる文明開化の世の中となつて、物質文明には不便であった、『旧』文明は一切、物笑いの対象となつた。或る見方をすればこの事は正に、文明の観念が精神より物質に移住したものである。

もういいかげんにこの『旧』に対する恐迫からは卒業してもよからう。しかもまだまだ、否、今日はいつそうこの『旧』という事を恐れる。何でも『新』の字がつけば生氣ある文明的な事だと思ふ。この事は笑うべき事である。あれは古いと一口にいい去るものをよく味わつてみる事が今後の文明にとってではなくてはならぬ一つの文明成形上の要素となるであらう。」

国語学者の山田孝雄^{よしお}が敬語について語った第1巻収録の文章（一九三二年）は、形式的復古と伝統的精神賦活の区別、そして近代的感觉がむしろ伝統的精神賦活の契機としてありうることを示しています。

「人あるいはいわん。敬語は専制時代の階級制度を背景として発達したるものにして、自由平等の新時代には排斥すべきなりと。これまた皮相の見にして全く敬語の真意を知らざる徒の言のみ。もとより階級制度の著しかりし時代にはそれを背景として敬語が異常に発達したりしは疑うべからずといえども、それも実はただ形式的に繁文褥礼となりたるのみにして、その繁雑なる形式は明治維新以後社会の狀態の改まると共にようやくにすたり、今やその古の繁文褥礼を知るものほとんどなくなりたるにあらざるや。しかも敬語はなお依然として一定の方式を以て行われてあるのみならず、口語の敬語法の如きはかえりて候文の敬語法よりも実質上進歩し発達せるところあること本書に説く所の如きにあらずや。されば吾人はいう。敬語は明治維新以後かえりて活潑の生命を得て復活せりと。そのかくいうゆえんはかの万葉集及びその以前の文献に伝うる敬語の現象と現代の口語の現象とが共に活力に富み生氣に満ちて、一道の氣脈相通するものあるにかかわらず、候文ないし中古の雅文の敬語には形式の整える点はあるとしても生氣乏しかりしを以てなり。されば吾人は現代を以て敬語の衰期と目することなくかえりて復古更新の盛時なりと目するものなり。かの敬語の衰滅を説くが如きは全然国語を知らざる徒の妄言のみ。」

内発的な近代創造のために、伝統的なものを賦活しつつ西洋的近代思想を相対化することについて、民芸運動の柳宗悦は第1巻収録の文章（一九五八年）でこのように語っています。

「美への考察は近世では、美学なる一門があつて既にたくさんの方が日本でも出ているが、何れも西洋

本書について

近代思想の上にのみ築かれているのである。しかし私共が美学書を書くからには、東洋的体验の上に立つのが当然であり、また必然であろう。それによって西洋人が見届けなかった面を見る事ができる。」

歴史家の津田左右吉も、第2巻収録の文章（一九五二年）でこのように語っています。

「日本人は近代に至るまでヨーロッパの文明の圏外に立っていて、その形成には関与していなかったから、その圏内にあってそれに制約せられているヨーロッパ人とは違い、外部から自由な批判をそれに對して行うことのできる地位にあることを、知らねばならぬ。」

能楽批評という分野を創造した英文学者野上豊一郎による第1巻収録の文章（一九二五年）でも、近代的概念で伝統的なものを評価することの問題が指摘されています。

「いわんや能の狂人たちは今日私たちのいう所の精神病患者では決してない。私たちは、能の狂人たちについて、今日の科学の論証する精神病的变化の徴候を認め得べきか否かを調査する必要があると感じない。能の狂人たちは——もし精神病的にこれを観察せねばならぬとすれば——一種の精神錯乱の状態にある者と見てよい。精神錯乱者は必ずしも精神病患者ではなく、またその錯乱状態には一時的のものが多く。しかし、これは私たちの問題にとってむしろ余計な詮索である。能が近代文学の特質の一つなる科学思想に根拠を持つ現実性の上に立てられたものでないことをば、私たちは十分に理解している。随つて能の狂人たちをそういう方面から観察しようとするもののいかに誤っているかはいうまでもない。能の狂乱は、ただ芸術においてのみ認めらるべき特殊の狂乱である。」

「再び写実主義に戻るが、能の写実主義をわれわれが今日西洋思想の影響を受けた考え方で解釈することは妥当を欠く。西洋のいわゆるリアリズムは、外界の事象をそれが如く表現することを意味する。能の写実主義は、上に世阿弥の言葉の二、三を引用したものに依つても理解されたであろう如く、

外部からでなく、内部からの写真である。先ず、その物になるべきだと彼は説いた。そうすれば形はおのずから似て来るはずである。初めに形から模倣してかかるのではなく、先ず精神移入が行われねばならぬ。〈加茂〉を演じるには、先ず別雷の神と同化して、われはこれ、王城を護る道、わけいかずちの神なり、の自信を以て臨まねばならぬ。」

国語学者山田孝雄が第1巻収録の文章（一九五〇年）に記した体験談は、こうした事情をリアルに伝えています。西洋語の文法を直訳的に日本語にあてはめることが流行して以来、「は」は主格を示す助詞であるという説が行われ、それが勢力を占めるようになった情勢を回顧したものです。

「今に至っては時効にかかっていると云ってもよいから、ここに明らかにいうが、著者が『日本文法論』を命がけで著述するに至った最初の動機をつくったのはこの関根正直氏の著書であった。ここに少しく脱線気味であるけれどもこの学問のためにわざと一言しておこう。

著者は丹波国篠山の鳳鳴義塾に国語の教師をしていた。当時学校で定められていた文法の教科書が上の『普通国語学』であった。著者はその主格の助詞の条をそのまま受売りの講義していた。ところが一人の生徒があつて質問しつつ自分らの用いている『は』という助詞は主格の外のものをも示していると云つていろいろ実例をあげて質問し、本書の説はわからぬと言うのであつた。自分の講義は教科書の朗読の程度のもので、これに即答はできなかった。それで答は次の週まで待つてくれと云い、さて考えれば考へるほど、生徒のいうことが正しくて教科書が正しくないことが明らかになったので、次の授業には生徒にあやまったのである。しかし当時大学の国語学というものが中学二年生よりも劣つているということを考へて見たときに、我が国語の学問の貧弱さに悲しくもあり腹立たしくもあつたが、

本書について

しかしながら、世に大学者も少なからぬことから、正しい説も世に公にせらるるであろうと、それから一ヶ年ばかりの間、国語国文に関する学術上の論説を深く注意してほとんど洩すまいとして読みあさったけれど、一人もその正しい説を出すものがなく、いずれも同じ様なことを繰り返しているに過ぎなかった。そこで自分は思った。こんなことで時日が経過してしまえばわが国語の正しい研究は全く行われず、しまいには西洋人に日本語を教えてもらう様なことになるかも知れぬ。今はまさしく国語の災難に遭うている時である。これを救うて正しいことを明らかに示さねばならぬ。それには火事は見つけた人間が先ず消さねばならぬと同じく、かようなことを見せられた自分が先ずこれに没頭せねばならぬと決心してここに日本文法の研究にほとんど半生を捧げたのであるが、その動機は『普通国語学』という書に『は』を主格の助詞としてあったことにあり、その『は』が主格を示すものか否か、係^{かかり}ということはいかなるものかということに自分の研究の出発点があり、その係ということが確認せられた所に自分の研究の到着点があったのである。」

近代性には専門化と分業化という傾向も伴っています。日本でも近代化は国家主義化と並行的に進められました。が、国家主義的な近代化がもたらす専門化と分業化によって、本来目指された福祉が阻害される場合は少なくありません。本書第2巻に文章を収録した細菌学者の北里柴三郎は、近代化に疑いをもつといった立場ではまったくなく、日進月歩の科学によって衛生行政の近代化を強力に推進した人ですが、近代性がもつ専門化と分業化の弊害を痛感し、それを克服した人です。

北里は第2巻収録の文章（一九一四年）のなかで、大学的な専門科目の分業体制は医療福祉実現の障害になると批判して、自己の研究所の理念を次のように語っています。この話は、北里が長年経営した国

立伝染病研究所を国立大学の附属機関へと改組しようとする政府と北里が衝突し、北里がやむなく伝染病研究所を辞して、新たに北里研究所を設立することになった事件に関するものです。

「前述の如く伝染病研究所が衛生行政の機関として遺憾なきを期せんとするには学術の研究を一日もゆるがせにすることはできないのである。例えば血清の製造にしてもその製造発見は今より二十五年前であるが二十五年後の今日においては同じ血清であっても昔日の製造法では学問の進歩が許さない。痘苗の製造もしかり。予防液の製造もまた同じで年々歳々学問の進歩に従って孜孜として研究を積み改良を加えてゆかなければならぬのである。もしも伝染病研究所がこの研究を怠って二十五年前に見した血清の製造を今日まで保っているが如くんば、これは日本の伝染病の予防機関たり能わざるものと言わねばならぬのである。しかし伝染病研究所は幸いにその誇り^そを免かるだけの功績を積み、常に大奮闘的の学術研究を重ねて来たのである。この点が私の主唱と大学派のいうところと議論の分かるところであるのだ。しかるに当局者は伝染病研究所という名称のあるがために、すなわち伝染病の研究する学術の府であるならばこれを大学に隸属するのが当然であるという様に単純に考え、大学派の人々の考えは衛生行政を実地に応用するのにはその機関が必要であるということには一向目を着けないで学制統一呼ばわりをする。これほど矛盾したことはない。いやしくも伝染病研究所に足を踏み込んで我々のなしつつある事業の如何を一度観た人は、伝染病研究所が内務省の衛生行政の機関として一日も欠くべからざるものであることは了解するのであろうが、不幸にして当局の大臣はこれを知らず徒に名称に拘泥してこの妄断をあえてせるは実に我が学問の神聖を瀆したといっても差し支えないと思うのであるが、伝染病研究所と大学とでは研究の方針が全然相異なっている。

例えばここに一伝染病患者があった時にその患者の血液を検査しなければならぬとかあるいは尿の検

本書について

査、糞便の検査をしなければならぬという様に一患者について種々の研究をしなければならぬ場合がたくさんあるのであるが、いかに万能なる学者にしてもことごとく専門の学術知識を完備した学者はない——もし大学にそういう学者があるならばそれは実に世界の珍宝であるが——それはあるはずもなし、またあり得べからざることであるから、各専門の学者が一所に手を揃えてあらゆる方面に差し支えなく充分に検索しなければならぬ。伝染病研究所は年来かくの方針に拠って研究して来たのである。しかるに大学においては例えば内科外科あるいは生理病理衛生医化学というが如く種々に学科が分れ、それに各担任の教授があり、学生を教育する傍らにそれぞれ専門的に研究しているのであるけれども個々独立しておいてあたかも群雄割拠の状を呈し、自分の領分内には他の人の一歩も踏み入ることを許さないから、医化学者が或る病気の尿の検査をしたいと思っても容易に尿はもらえない。あるいは細菌学者が血液の検査をしたいと思っても血液が手に入らぬというように『自分のことは自分一人でする』というようにおのおの狭い領分の下に割拠しているから、広くこれを研究に応用することができない。従って何等研究の成績が挙げられないのである。

伝染病研究所は夙にその弊害を一掃してヨーロッパ、殊にドイツのコッホ先生等の研究方針を参酌して一定の研究方針を立てたのである。その研究法はいわゆる総合研究とでも名を附けたら適當であろうか、すなわち我が伝染病研究所には病室を備へ患者を收容し、病理解剖学者細菌学者は元よりのこと下等動物プロトツオンの如きものの研究にまで専門の動物学者を置き、医化学者も置き、あらゆる総ての伝染病の研究に欠くべからざる各専門の学者を一堂の下に網羅しているからここに一人の患者が入院すればその患者の受持ちなる内科の臨床的専門医が充分臨床上の研究をなすは言うまでもなく、血液の検査は動物学者に、尿や便の検査は細菌学者に、進んで尿の分析は医化学者に遣らせるようにして、一患

者についても多くの専門学者が各方面から力を協せて研究するのであるから伝染病患者の研究は立ち所に完全にできるが、その患者が不幸にして死亡せる場合には患者あるいは家族の承諾を得れば直に解剖する。そのためには病理解剖学者がおつて互いに講究してその患者についての生前ならびに病気の経過を知悉することができるのである。これすなわち総合研究の利益にしてまた実に今日の医科大学に見る能わざる伝染病研究所の特色である。しかもこれは我が日本の伝染病研究所の特色のみに非ずして欧米各国の研究も同一方針を實行しつつあるのである。この総合研究を創意して実地に行つたのはドイツのコッホ先生である。コッホ先生が七年前に日本に來られた時分に伝染病研究所には度々訪問されて研究所の組織ならびに所員一同の日常の活動を親しく目撃し、非常に称揚されてかくの如き研究の法は元來ドイツにおいて自分の始めて遣つたことであるけれども自分の研究はここまで完備しておらぬ、何故ならば研究上の必要条件としていたいの事は具備しているが自分の研究所では血清あるいは痘苗を製造することは未だ遣つておらぬ、しかし理想は是非ともここに達しなければならぬと考えておつたのである。しかるに今日日本に來て図らずも我が多年の理想の実現せられているのを觀て衷心歎喜の情に堪えぬと言われた。これを以て見ても我が伝染病研究所の研究方針の完備していることを証するに足ると思う。」

日本の近代化をめぐる議論の實際においては、進歩／保守、右翼／左翼という色分けは、それほど單純に白黒のつくものではありませんでした。民権的な方向性をもっていた動きが歴史のなかで国権的な色合いを濃くしていく、あるいはそうした対立的要素が共存している例は少なくありません。北一輝や大川周明はそうした実例でした。進歩／保守、右翼／左翼という二分法によつたのでは、その思想と行

本書について

動の歴史的意味をうまく理解できない一例として、本書第2巻に大川周明の戦後の文章（一九五五年）を掲載しました。大川周明は東京裁判において、民間人としてただ一人A級戦犯容疑者として起訴された人物であり、いわゆる右翼中の右翼とされる人物です。大川はその文章で次のように述べています。発言の意図はさまざまに推察しうるものですが、単純な図式化ではつかめない現実を示唆する好例です。

「世間は私を右翼と呼ぶ。時には右翼の巨頭などとも呼ぶ。右翼とは左翼に対しての言葉である。左翼とは何か。それは共産主義者または社会主義者のことである。共産主義と最も極端に対立するものは何か。それは資本主義である。果してしからは資本主義者または財閥こそ、まさしく右翼と呼べるべきではないか。私は年少のころ社会主義に傾倒したことはあるが、未だかつて資本主義や財閥を謳歌した覚えはない。従って私を右翼と呼ぶことは正当でない。

私は反共産主義者でもなく反資本主義者でもない。強いていえば非資本主義者であり、非共産主義者であり、いっそう適切に言えば非主義者である。私は一切の『主義』なるものを奉じない。凡そいかなる思想でも、主義としてこれを固執すれば、必ず世に害毒を流すようになる。主義とは人間の生活内容を統一するに適當なる立場のことである。人生は不断に流動して息むことを知らない。従って統一に適當する立場も、また時により場合に應じて変らざるを得ない。事ある時は軍国主義、事なき時は平和主義、国貧しければ産業主義、国豊かなれば文化主義、総じて個人または国民がそれぞれの場合に應じて取捨する立場である。しかるにそれ等の立場の一つだけを万古不易の真理なるかのように主張して自余一切の立場を排撃することは、頭腦のはたらかが器械的であること、また我執の強いことから起る。それ故に主義の標榜は常に一種の挑戦である。」

書肆心水では二〇〇四年秋の創業以来、右翼／左翼、保守／進歩の図式を超えたところで日本における近代化はいかにありうるかということについて考えた人々の著作を再評価する仕事に力を入れてきました。版を新たに組んで表記を現代化した覆刻版、新編集による論文集、テーマでまとめた本書のような共著書の刊行です。その皮切りとなった『北一輝思想集成』刊行の二〇〇五年八月からちょうど十年のこの機に、これまで刊行してきたものからいくつかを抜き出したのが本書です。各巻独立した書物としてお読みいただけますし、おのの文章はみな独立したものとしてお読みいただけます。

二〇一五年八月 書肆心水

SAMPLE
Shoshi-Shinsu.com

異貌の日本近代思想

「1」

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡例

- 一、各文章の初出はそれぞれの末尾に記した。
- 一、各文章のタイトル、見出しの文言は省略あるいは変更した場合がある。文章のタイトルを変更したものは元のタイトルを、初出を記したところに併記した。
- 一、本書では読みやすさをむねとして、漢字と仮名の使い方や送り仮名、仮名遣い、片仮名語の表記を現在一般の感覚で違和感の少ないように調整した。また、読点と中黒点を補ったり（例えば「にさん」と読むべき「二三」を「二、三」に、「朝鮮人台湾人」を「朝鮮人・台湾人」に）、異体字関係にある漢字同士、字義の通じ合う漢字同士は現在一般に使用されるほうで表記した場合がある（例えば「侯」を「侯」に、「互」を「亙」に）。
- 一、本書刊行所による註記は「」で括って文中に挿入した。

西田幾多郎

.....

〈哲学〉

西田幾多郎（に시다・きたろう）。一八七〇年生、一九四五年歿。四高中退。東京帝国大学哲学科選科修了。四高講師などを経て京都帝大に就職、一九一三年に教授となった。和辻哲郎、田辺元を京大に招聘し、また三木清ら学生を育成し、日本人哲学者集団の中心的存在として活躍した。コンスタントに論文を書き連ね、数が或る程度まとまることに『哲学論文集第一―第七』などとして刊行し、死に至るまでの間つねに、主体と客体の分離を前提とした論理をこえる新しい論理を追求した。「私の論理について」と題された書きかけの絶筆には次の言葉がある。「私は多年の研究の結果、我々の歴史的行為的自己の立場からの思惟の形、即ち歴史的形作用の論理を明にし得たと信ずる。従来論理はすべて抽象的な意識的自己の立場からの論理であつた。私は私の論理によって種々なる自然科学の根本的問題及び道徳宗教の根本的問題をも考えて見た。而して従来論理の型によって考えられなかった問題が考えられると思う、少くともその解明への道が与えられると考える。」

新しいロジックを求めて

日本文化の特質とは

〈三木清〉 いま日本精神とか日本主義とかいうものが問題になっていますが、それについて日本文化の根本的特徴とは何か、先生の御意見を伺いたいのですが……

〈西田幾多郎〉 それはまだよく考えておらんのだが、大体、私は、日本というのは、東洋のうちのひとつの国には違いないけれど、支那とかインドとかとは違っていはしないかと思う。ある意味ではギリ

シャなんかと似てやしないかと考えてるんだがね。ギリシャでも自然というものが人間と対立していたというより、どういうか、まあ親しみがあつたのじゃないか。そんなところが日本にもありはせぬか。日本人は感覚的で、受容的で、進歩的なところがある。ギリシャ人は主知的だけれど、日本人は情的で、ギリシャ人は彫塑的だが、日本人は音楽的なところがありはしないかと思う。これまでの日本人は、自分で固定した文化を持つというより、いろいろの文化を受け入れて、そのうちに日本的な情といったもので、音楽でものがつながつてゆくといったふうに日本化してゆくのだ。音楽は形がないものだが、しかしこれは形がなくてしかも形があるものだともいえる。とらわれずに他のものをよく採り入れて日本化してゆくが、同時に一方では全く非合理的に感情的に働くことがある。だから何時でも日本は他のものを採り入れておいて、また一方反動的に極端な排外にもなることがある。

そういう情的文化はいわゆる形を持たぬから、弊とすれば、ごく小さなものになる。鳥羽僧正の画でも大雅の画でも、すっかり脱俗しているが……あんなように形のないものになるのは、日本人の気分から出てくるのじゃないかと思う。だからして日本の文化が世界的に進んでゆくのは、どうなるか。もしそれがひとつの特徴として出るなら、音楽が形を持つというような意味で世界的意味を持つてくるんじゃないかね。生命はものを形作ることを本質とするが、それにはギリシャ式の彫塑的なものもあり、近代の科学的なものもあるが、それと共に音楽的なものもあるはずで、世界文化においてこれは特色のある形だと思う。音楽的なところがあるので、日本精神はベルグソンなんかと結び付くとも考えられるわけだろう。これには必ずしも同意しないが、ベルグソンは形のないもので、音楽には形もあると思う。しかしこの問題は今考えていけないので、ただそんなふうに感じているだけだが……

《三木》 これまで日本人は物を対象的にみることが十分でなかったんじゃないでしょうか。画にし

ても遠近法がなかったように。

〈西田〉 それは日本文化が世界的文化としては不足している点だ。しかし対象的なものも、どこまでも対象化されぬものを持っている。空間的なものにも時間性があると思う。これからは、対象的な方面を対象化しないというのではなく、対象化されないものに形を与えること、いわば音楽の対象化といったことが大切で、これは日本人にできない事ではないと思う。西洋哲学にも何かそこに足らんものがある気がするからね。

〈三木〉 西洋人のいう体系的哲学は日本人にはできにくいように見えますね。

〈西田〉 まあそうだが、歴史的文化としてはやはり対象的なところ、音楽が形を持つといったことが重要だ。

〈三木〉 日本文化と儒教とはどうでしょう。

〈西田〉 それは違う。儒教と本来の日本とは違っていると思う。東洋的でいてギリシャ的ということが日本的だろう。日本は先進国としての支那の影響を受けてはいるが、漢学者の考えるようではない。

〈三木〉 儒教のために日本文化が自由なものでなくなったかと思えます。しかし儒教も先生のおっしゃるように情的な日本の文化に鍛錬を与えるには役立ったとは思いますが。

〈西田〉 日本精神を儒教的に考えるのには一致できないね。

現代哲学の中心問題

〈三木〉 この頃日本でも流行しているハイデッガー、ニーチェなんかのニヒリズムの無と東洋の無と根本的にどう違うでしょうか。

〈西田〉 それは違うね。東洋の無は、現在が無だが、西洋の無は有から考えられていると思う。東洋の無は、無が有なんであって、つまり現在が無だということがある。無が現在だということが西洋にはない。ハイデッガーの無も極限のようなものであり、ニーチェはずっと現実的だが、日本人は現実そのものが無だというように考える。ニーチェの超人は高山樗牛あたりが平清盛と似ているとかいっているが、日本人は本来ニーチェの超人という風にゆくのではなく、熊谷直実が蓮生坊になるといふ風なのじゃないか。どこまでもすべてを否定してゆく、イプセン、ニーチェ流にはなしにね。自然というものも、自然に自分が入るので、ニーチェが現実を否定したものは力強いものだが、それが日本人では自然の中に入って精進して得られるというような違いがある。

支那ではどうかな、熊谷蓮生坊みたいなのはいるかな。上杉謙信が武田信玄に塩を送ったというようにところは西洋人には考えられないことじゃないかね。全く相反するものが一つに結び付く、その根柢には無がある。敵味方がいつでもひとつになれる。その代りすぐ妥協したり、主義に忠実でないところもある。主義が重んぜられないで、ただ感情で結び付いて親分乾分のよう^{こぶん}なものができ、何でも情実関係でゆく。これは悪い点だ。どこまでも対象化していると同時に情的な統一というものがなくてはいけない。それができると、日本としての特色のある大きな文化ができるのだ。もっと深い大きなものが必要ね、思想でも文学でも。

〈三木〉 それでは現在の哲学の中心問題はどのようなものでしょうか。

〈西田〉 近世の哲学は一方主観を基礎としていた。中世哲学はキリスト教のドグマで支配されていたが、それがルネサンスになって人間、つまり主観に帰って、デカルトの哲学のようなものができた。他方中世の権威的な、宗教的な哲学から解放されて、経験に帰って、ベーコンみたいな経験派の哲学がで

きた。ドイツ哲学はこれら二つの立場を綜合しようとしたとも見られるが、しかしカントの主観から始まってやはり主観の立場から客観をみたので、どうしても主観的にとどまっている。客観から出発して、経験や科学を基礎とする哲学ではまた、どうしても主観——人間の自由までも含む事はできない。マルキシズムなんか単なる客観主義でないとしても、本当の個人まで包むことはできないだろう。それで本当の出発点は現実からでなければならぬ。現実の主観的で客観的であり、時間的で空間的であり、現在の世界とは動く世界である。

今までのものの考え方は、主観客観のどちらから出発しているのだが、主観客観を包む論理がなくてはならぬことになる。そう考えると、近世の主観客観が対立しているような立場よりも、元へ戻った方がよくはないか。ギリシャには主客の対立が発達しなかった。その意味で幼稚ともいえるが、両方を含んだ岐れる前のものがあつたので現代の哲学はギリシャ哲学にまで帰ってみなけりやならぬと思うね。

ギリシャ人のロジックは普通いう形式論理だが、実在は表現的なものと考えられた。この頃は表現を主観的に考えるが、表現は我々を動かす力を持っている。現実のものはみな表現的で、表われるものはロゴスであり、ロゴスによって実在を捕えるのである。アリストテレスのロジックは抽象的ではあるが、メタフィジックとひとつのものだ。ギリシャの実在はプラトンのエイドス（イデア）で、ロゴス的なものであつた。ヘーゲルが論理と形而上学とを一つに考えたのはギリシャも同じだ。いま我々は、主観客観、空間時間を包むような論理を持つ必要がある。

〈西田〉 近代では主観は論理の外にあることになるが、主観も考えられる以上、論理のうちにいらねばならぬ。ギリシャでも主観客観は別々でなく、心理学もアリストテレスは論理の立場で考えている。それが必要だろう。ヘーゲルはそう考えていた人だと思う。ヘーゲルの弁証法的論理は主観客観両方を含んでいる。それならヘーゲルでよいかというと彼の論理では働く個物と個物との関係が考えられない。働くのはいつでも個物と個物とが働くので、つまり全く独立なものが関係することである。これはヘーゲルの立場からは出てこない。彼がアイデアリズムになってしまった訳で、働く個物と個物との関係が彼の論理では考えられないからだ。世界をガイスト（精神）という一つのものの発展と考えるヘーゲルの論理が真の弁証法にならないことを示している。弁証法では本当に相反するものがなくてはならぬ。絶対に独立なものが結び付くこと、私のいう非連続の連続でなければならぬ。ヘーゲルは時間的空間的にならぬ。だから反対にマルキシズムが考えられてくる。要するにこれまでの哲学は実在を考えても、対象化してみても、そのときは働く自分が入っておらない。客観主義がそれで、そうかといって今度は世界を自分のうちに入れると主観主義になってしまう。

現実の世界は其中で自分が働いて死んでゆく世界なので、このような世界を考えることが昔から欠けている。主観即客観というと、例の主客未分の状態を考えているといわれるが、あれは一種の神秘主義で、神秘主義は主観主義である。私の考えを神秘主義というのは誤解だ。私は、実在は歴史的な物であると考え。歴史的な物は主観的客観的なものである。このような実在を考えるには現象学でもカント哲学の立場でも駄目だと思っている。これからは歴史哲学が哲学の中心問題にならなければならぬ。それにはこれまでの方法でなく新しいロジックがなくてはならないね。

〈三木〉 それでは歴史的事実の構造はどう考えられますか。